

<巻頭言>

博物館長 風間信隆

3.11 東日本大震災の影響により、当博物館も1ヶ月あまりの休館を余儀なくされましたが、その後、関係各位の懸命なご尽力・ご支援により、年度当初予定された事業計画はすべて達成できましたことをご報告申し上げますとともに、関係各位のご支援・ご協力に心よりお礼申し上げます。

2011 年度博物館に関わる、特筆すべき展示活動では、何よりも2011 年6月から7月にかけて開催され、明治大学創立130 周年記念事業の一環としても取り組まれました「漆器 JAPANWARE 文理融合型研究から見てきた漆の過去・現在・未来」展を挙げるすることができます。漆器は日本を代表する伝統工芸品として知られておりますが、漆の「高い品質と驚くべき素顔」は日本人の間でも共有されているとはいいたいものがあります。そこでこの展覧会では、明治大学のバイオ資源化学研究所と日本先史文化研究所との共同企画によって、これまでの「漆」に関する学内の研究蓄積を基盤として、その研究成果を社会に発信するとともに、在学生教育・生涯教育の機会とすることを目的としました。「商品としての漆器」の分析・評価、文学部の阿部芳郎先生が取り組む「縄文時代の漆器」、そして理工学部の宮腰哲雄先生が取り組む「次世代高機能材料としての漆」に関する最新の研究成果をベースとして展示が構成され、同展示期間中に3千5百名を超える入場者を数える一大イベントになっています。この特別展の関連企画として実施されたリバティアカデミー・オープン講座には100 名を超える受講者が参加されました。また、並行して連続講座も6月から7月にかけて全6回が開催されました。

また2012 年1月から2月にかけて南山大学人類学博物館との合同特別展「人類史への挑戦ー考古・民族コレクションの系譜」も開催され、同館の紹介とその考古学研究の紹介、G. グロート神父と日本考古学研究所のコレクション、上智大学北西タイ歴史・文化調査団の調査資料（南山大学に一括移管）が展示されました。この特別展は開催期間中に4千2百名を超える方々にご見学頂くことができました。引き続き、南山大学との交流事業が行われますが、この経験の検証を踏まえてさらに質的に高い特別展の具体化等交流事業を促進していきたいと考えております。

さらには2011 年度に新たに当博物館に収蔵されました資料を中心として紹介する展覧会、商品部門、刑事部門そして考古部門のそれぞれで、さまざまな明大コレクション展を開催致しますとともに、リバティアカデミー博物館入門講座・公開講座を開催することができました。なかでも「吾妻ひでお 美少女実験室」、「民衆の凶像展」等の展覧会には合わせて1 万人近い多くの入場者をお迎えすることができました。

大学博物館の使命は何よりわが国の最高学府としての高いレベルの調査・研究に基づいてこれを教育に活用するとともに、その成果を社会に発信することによって、社会における大学のレーゾンデートル（存在理由）を高めることにあると思われまふ。2004 年にアカデミーコモンズの地階に従来の商品陳列館、刑事

博物館、考古学博物館という 3 つの博物館を統合して新たなスタートを切った新博物館も多くの方々のご支援・ご尽力によってすでに年間 8 万人を超える入館者を迎えるまでになっており、また大学基準協会の大学評価（2008 年）でも高い評価を受け、明治大学の研究と教育の独自性を社会に発信する上で大きな役割を果たしております。これらの成果に対する、杉原重夫前館長・渡 浩一副館長を中心とする学芸員、教職員の方々の多大のご尽力を忘れることはできません。とくにこの場を借りてご定年により 2011 年度をもって館長の職を辞された杉原重夫先生の当博物館の発展へのご貢献に心よりお礼を申し上げたいと思います。またこうした博物館の発展において学生諸君、教職員そして「友の会」の皆様のご協力・ご支援にも支えられていることが忘れられてはなりません。この点で博物館の一層の発展のためには、博物館業務に関わる関係者の方々や入館者の方々との積極的な「対話」(dialogue)と「共創」(engagement)が不可欠であり、これによって博物館のアカウンタビリティ (accountability) と透明性 (transparency) の向上を図り、博物館の社会的使命 (social mission) と社会的責任 (social responsibility) を果たしていくことが今日の博物館にはますます求められているようにも思われます。

当博物館が、我が国にある、数多くの大学博物館の中でも一頭地抜けた存在として評価を受けておりますのも、ひとえにその基礎部分である調査・研究のレベルの高さにあるといっても過言ではありません。研究・教育・社会連携の好循環を連動させることでさらに質的向上を目指すとともに、明治大学らしい、固有のミッションを絶えず問い続け、過去の「モノ」を通して現在のアイデンティティを再認識し、未来を展望する役割を果たし続けていかねばならないと考えております。

(かざま・のぶたか 明治大学商学部教授 2012 年 4 月 1 日博物館長着任)